

小箱の中の肖像

千あき
暁

多くの人々と同じように、私の初恋も叶わなかった。

死を目の前にした今、繰り返し思い出すのは少年時代のあの遠い夏ばかりだ。庭園の奥深く、秘密の神殿で舞う少女。他の誰も知らない、私だけが知る、小箱の中に閉じ込めた思い出だ。

子どもの頃の夏は、毎年、都のうだるような暑さから逃れるために、家族で避暑地へ移るのが習わしになっていた。

高名な避暑地で行われていたのは静けさとはほど遠いにぎやかな有力者たちの社交の続きだった。連日大人たちは、遠乗りだ、茶会だと、遊びという名の仕事に忙しく、子どもであった私は拒否権なく引きずり回されていた。それは家督を継ぐ者としての教育の一環であり、そのときに培われた社交の技術と経験のうちに大変役に立ってくれたものの、当時の私は押し付けられた陽気さうんざりし

ていただけだった。

気がめいるばかりの私にくらべて、夏のお祭り騒ぎに浮かれる地元の子息たちの心は素朴すぎ、残念なことに複雑な胸の内を話し合おうと思える相性ではなかった。都の友人たちは遠く離れたそれぞれの故郷で夏を過ごし、堅苦しい年長者たちの目をかいくぐりおもしろいことを教えてくれた若い騎士たちの多くは、先の戦争によってその命を刈り取られた後だった。

気の合わない人付き合いから離れたいと願っても、避暑地を取り囲む原始の森の闇は濃く強く、昼間でも不気味な気配を漂わせており、気軽に一人歩きができるようなものではなかった。おおらかに高原の自然が広がっている分だけ人間の居住地は圧迫され、その小さく狭められた社会の中で、私はいつも窒息しそうになっていた。

息詰まる日々の私のわずかな息抜きが、別荘を抜け出して行く庭の探索だった。よく手入れされた庭園はそれなりに広く安全で、暇を見つけては何十回と繰り返ししていた。親は放任主義であつたし、使用人たちに見つかつても笑つてごまかせばよく、孫を亡くしたばかりの執事長が以前にも増して私に甘くなつていたのは承知していた。限られた敷地の中で私は無敵だったのだ。